

平成31年度
入学試験問題

国語

2月4日 第1限

仁愛女子高等学校

一
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

仲間以外はみな風景。そう言ったのは社会学者の宮台真司さんである。どんなにたくさんの人の中や公共の場においても、若い人たちの目には、自分のすぐ横にいる仲間や友だち以外は電柱やガードレールなどの風景にしか映っていない、という意味だ。きわめてシライ性の高い「若者の法則」^①だと思ふ。

もちろん、電車の中でもこの法則は通じる。たとえ満員電車に乗っていても、若者にとっては家具や植木鉢と同じ車両にいるという感覚^aしかない。だから、平気で化粧もすれば弁当も食べる。部屋の中で、「机が見ているから恥ずかしくて化粧が^bできない」と言う人はいないだろう。それと同じことだと考えれば、「どうして電車であんな傍若無人なふるまいをするのか」という謎も解けるのではないか、と思ふ。

ただ問題は、この「若者の法則」は若者が勝手に決めてしまったもので、社会全体のものではない^d、ということだ。全員がこれを共有し、「電車や公園でもまわりの人間はいないものとして行動してよい」ということになれば、それぞれが勝手なことをやればよいだけなのだから摩擦も起きない^e。直接、自分に迷惑や被害が及ばない限りは、「見えないようにする」ことですべてをすませるわけだ。しかし、まだ多くの大人たちにとっては、若者が電車で化粧をしたり恋人とベタベタしたりするのは「みっともない」「フユカイだ」と感じられる。そのギャップが問題なのだ。

では今後は、たとえば電車の中などでは、どちらを標準ルールとすればよいのか。A 「という大人ルールの方が。」「という若者ルールの方が、それとも」 B 「という大人ルールの方が。」

私自身は若者ルールにシフトしていくのも仕方ないではないかと思う一方で、「それはイガイにむずかしいことかもしれない」と感じて^③いる。なぜなら、「他人の目を意識しない」ことは簡単だが、「自分も他人を意識しない」ことはかなり高度なテクニックを要するからだ。

最近、「電車や駅でいちばん暴力的なのは五十代男性」という調査結果が新聞に^エノっていた。酔っ払ったり仕事で疲れたり、と理性や意志の力が弱まっているときに、電車^ウで他人にぶつかったり駅員に何かで注意されたりすると、つい大声をあげたりなぐりかかったりしてしまう。そんな大人がけっこう多いらしい。(C)、他人に対して寛大になったり、すべては「風景」だとその言動をいっさい無視したりするのは、実はイガイにむずかしいのだ。自然に周囲を無視できているように見える若者も、実はエネルギーを

使っているのかもしれない。

今の若者たちが四十代、五十代になり、仕事や家庭でのストレスがたまってくる年代になっても、電車で「自分は自分、他人は他人だよ」と思い続けられるだろうか。みんなが好き勝手に食べたり歌ったり踊ったり着替えたりしている車内で、すべてを「見ないふり」してすませることなどできるだろうか。「自分はやりたいことをやるけれど、他人がそうするのは耐えられない!」と、キレる大人が続出、などということにはならないだろうか……。そう考えると、他人をまったく意識しないという若者ルールの実行には、大人ルール以上の理性や意志の力、ある種のトレーニングが必要、ということがわかるだろう。

(D) 若者たちは、「好きなこととしていいじゃないか」と言うだろうか。「だいたいようぶ。問題なんて起こさないから、電車の中でもみんなが他人を気にしないでそれぞれ好きなことやろうよ」と言いきれる若者は、(E) それほど逸脱したことをしないような気もする。たとえば、よく問題になる電車内での携帯電話の使用にしても、多くの若者はメールだけかごく小声で会話している。大声でしゃべっているのは、たいてい大人だ。電車の中でひとりひとりが個室にいるかのようにやりたいことをやり、それでも車両全体では静けさや安全が保たれている。ちょっとSFじみているが、十年後には日本中の電車でそんな光景が見られるようになるのかもしれない。

(香山リカ『若者の法則』による)

問一 二重傍線の部分ア「シンライ」・イ「フユカイ」・ウ「イガイ」・エ「ノ」を漢字で書け。

問二 空欄「 A 」 「 B 」 に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

- ア 他人の目ばかりを気にせずに正しいことを行うべきだ
- イ 他人の目がある公共の場では、やってはいけないことがある
- ウ 他人の目を意識しなくても自分の行動に責任を持たなければならぬ
- エ それぞれが他人の目を意識せずに好きなことをする
- オ 安全を保つためには、みんなが他人の目を意識することが必要だ

問三 空欄（C）（E）に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア それでも イ つまり ウ たとえば エ そもそも オ おそらく

問四 波線の部分a、eの「ない」を同じ種類の二つのグループに分けると、次のどの組み合わせが最も適当か。記号を書け。

ア a b d — c e

イ a b c — d e

ウ a d — b c e

エ a c d — b e

問五 傍線の部分①「若者の法則」の内容として適当でないものの記号を書け。

ア 他人の迷惑になる行動をとらないこと。

イ 他人をまったく意識しないこと。

ウ 他人の言動をいっさい無視すること。

エ 他人に対して寛大になること。

問六 傍線の部分②「傍若無人」は「傍らに人無きがごとし」と書き下し文にすることができる。解答欄に返り点をつけよ。

問七 傍線の部分③「かなり高度なテクニックを要する」について、その理由を文中の言葉を用いて五十字以内で書け。（句読点を含む。）

問八 傍線の部分④「SFじみているが、」はどのような意味か、分かりやすく言い換えて書け。

問九 最近スマートフォンが普及し、多くの人がスマートフォンを操作している場面を目にする。公共の場所（電車の中など）でスマートフォンを操作することに対してあなたが否定的な立場に立った場合、どのようなことを理由にして否定するか。簡潔に書け。

一一 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

長崎県の五島列島に住み自閉症の兄を持つ桑原サトルは、中学三年生になって合唱部に入部した。そして、七月のNHK全国学校音楽コンクール長崎県大会で、緊張しながらも満足のいく合唱を終えた。本文に登場する「私」長谷川コトミは、いずれも合唱部の中学三年生である。

視線を感じて前方に目をやると、すこしはなれたところに長谷川コトミがいて、こちらを見ていた。一人ではない。彼女のそばには、桑原サトルと、どうやら彼の家族らしい三人組がいた。顔立ちがどことなく彼に似ている。お母さんはやさしそうな方で、お父さんは大柄な熊のような人だ。そしてもう一人、長身瘦そうく軀のお兄さんには見覚えがあった。Nコンがおこなわれている最中、ホワイエの椅子にすわっていた人である。そのフンフンイキから、発達障害のある方なのだろうとわかった。もしかしたらそのせいで、会場に入れなかったのではないか。合流してそのあたりのことをうかがってみよう。荷物を肩にかけて、彼らに駆けよった。

「エリはいっしょじゃなかと?」

長谷川コトミが聞いた。

「はぐれてしまったっさ」

「こちらは桑原くんのご両親とお兄さんのアキオさん」

彼女が紹介する。桑原サトルは、一歩ひいたところで、(A)はすかしそうにしていた。

初対面の三人に会釈をする。桑原サトルの両親が会釈をかえす。(B)合唱の感想などを聞いて、私は恐縮し、照れくさくなった。諫早文化会館正面にコンクリート製の階段がある。お兄さんは、そこに腰かけて、ほそながい足をかかえて背中をまるめていた。体をゆらしながら、風にそよぐ熱帯植物の葉を見ている。

「お兄さん、ずっとホールの外におったよね?」

私は桑原サトルに聞いた。

「うん、みんなの迷惑になるかもしれんけん」

「迷惑? こがん、おとなしかとに?」

彼のお兄さんは、さきほどから一言も話さない。

がつしりとした体格の、桑原サトルの父親が説明する。

「おとなしくななばい。さつきも、ずーっと聖書の内容ばぶつぶつ言いよった。いやなことがあってパニックになったら、合唱の最中でも騒ぎ出すけんね」

I 言い方だった。

「合唱を生で聴けなかったんですか。もつたいなかですなえ、それは」

合唱をホール内で聴けたのは、桑原サトルの母親だけだったらしい。①その間、ハワイエで父親とお兄さんはタイキ^イしていたのだという。五島から海をわたって（ C ）来てくれたのに、ふたりはディスプレイ越しでしか合唱を聴くことができなかったのだ。

「もつたいなかですよ」

「よか、充分ばい」

父親はそう言うけれど、私は納得しなかった。

「いや、合唱は生で聴いた方が絶対によかです」

「こいつは、普通とはちがうけん、しょうがなかとよ」

「しょうがなかとですか？」

「そうばい、しょうがなか」

これまでの桑原サトルのお兄さんの人生についてかんがえさせられた。この人は小学校や中学校はふつうに通えたのだろうか？

おおぜいの人が出会う様々なたのしみをこの人も受け取ることができたのだろうか？ しょうがないの一言^②であきらめさせられてきたのではないだろうか？ この人になにかをしてあげたいという気持ちがわいてきて、私は長谷川コトミをふりかえる。

「なん？」

「ソプラノがここにおるねえ」

私はそして桑原サトルを見る。

「男声パートもここにおる。私はアルト。じゃあ、歌うしかないなー！」

「え？　(一いび?)」

桑原サトルが聞いた。

「もちろん」

「しかたなかねえ」

長谷川コトミは II する。伴奏も指揮もないけれど、まあなんとかなるだろう。私たちは、桑原サトルのお兄さんの前に
ならぶ。

「曲はなんがよか？　『手紙』？」と長谷川コトミ。

「今日だけでたくさん聞いたけん、ほかのでいいっちゃない？」と私。

短い相談の結果、だれでも歌詞をしっている有名な曲をセレクトする。

練習なしでも、まあ、なんとかなるだろう。

「やめれ、はずかしかけん！」

桑原サトルの父親がすこし怒ったように言った。もうしわけないけれど、ここは無視させてもらう。母親のほうはおもしろそうにしているだけで止めなかった。ありがたい。階段に腰かけているお兄さんの前に、私たち三人は横並びで整列した。お兄さんがすわっている段よりも、五段ほど下である。荷物とドロップスの缶を足もとに置いた。

「用意はいい？」

長谷川コトミと、桑原サトルがうなずいた。

「じゃあ、いくよ。いち、に、さん、はい！」

伴奏もないから、いきなり歌い出す。声がかうまく重なっておらず、出だしがみっともなかった。でも、コンクールでも何でもない場所での合唱だから、そんなことは気にしない。私たちはただ、歌うことをたのしめばいい。たった三人だったから、さきほどまるでホールにひびいていた歌声にくらべて弱々しいかもしれない。けれど、^③体の奥から、音楽があふれてくるのを感じた。

周囲にいた人々がふりかえり、コウキの視線をむけてくる。会話を中断し、足を止めて、私たちに視線をそそぐ。階段は幅がひろく、そこを中心に人があつまってきた。そのうちにざわめきはずまって、歌声だけがひろがっていく。

④ 胸の中にある、疼きいたずのようなものに気づく。
今さらこんな風に胸が痛むなんて理不尽だ。

しめつけられるように、苦しくて、涙が出そうだった。

私が息を詰まらせていることに気づいて、長谷川コトミが手を握ってくれた。

ぎゅっと、強く、握ってくれた。

もう、歌えない。

声が出なかった。

このまま、合唱もだめになるかとおもった。

でも、そのとき、助けが入る。

大会の最中、桑原サトルのお兄さんはずっとホールの外に座っていた。だから、大勢の人が目撃して、気にかけていたのかもしれない。私たちの歌っている相手が彼であることをしり、^⑤私たちの意図を汲んでくれた、というのはかんがえすぎだろうか。

すこしはなれたところから、歌声が参加した。

ほかの学校の見知らぬ合唱部員の男の子だった。

また別の方向で、帰りかけていた女子生徒二人組が、地面に荷物をほっぽりだし、私たちの合唱に参加してくれた。

家族と記念撮影をしていた生徒の集団が、私たちのほうにちかづいてきて、歌声を重ねてくれた。

桑原サトルの兄は、音のうずの中心で、歌声に耳をすませる。心から音楽に身をゆだねている。そうおもわせるジュンスイエな表情だった。

私一人が歌えなくなったことなんてどうでもいいほどに、合唱の規模はおおきくなる。その場にいた見知らぬ合唱部員たちが、即興であわせてくれる。歌声の数が増していくたびに、声は渾然こんぜん一体となり、うつくしさと迫力を増した。音楽への感謝と、よろこびに満ちている。

私はこの疼きをかかえて生きていくのだろう。合唱を聴きながら、そんなことをかんがえる。大人になっていくのだ。甘くて苦い、今を生きるために。

(中田永一『くちびるに歌を』による)

問一 二重傍線の部分ア「フンイキ」・イ「タイキ」・ウ「コウキ」・エ「ジュンスイ」を漢字で書け。

問二 空欄（ A ）（ C ）に入る適当なものの記号を書け。

ア わざわざ イ 一生懸命 ウ ひとしきり エ なんだか オ ちようど

問三 空欄 I に入る適当なものの記号を書け。

ア 楽観的な イ ほがらかな ウ 耳ざわりな エ ぶつきらぼうな

問四 空欄 II に入る適当なものの記号を書け。

ア 愛想^{あいそ}笑い イ 苦笑い ウ 含み笑い エ 薄ら笑い オ 照れ笑い

問五 傍線の部分①「らしい」と同じ意味のものの記号を書け。

ア 明日の天気は晴れらしい。

イ 彼女の発想はとてもあたらしい。

ウ 彼女の私服はどれもかわいらしい。

エ その行動はいかにも彼らしい。

問六 傍線の部分②「しようがないの一言であきらめさせられてきたのではないだろうか？」には「私」のどのような気持ちが込められているか。最も適当なものの記号を書け。

ア 障害を持っているために他人に迷惑がかかってはいけないという配慮をされて、これまでずっと行動を制限されてきたのではないかと思ひ、同情している。

イ 本人がやりたいと思ったことにことごとく失敗し、何一つ成し遂げることができなかったことを障害のせいになされたのではないかと想像し、かわいそうだと感じている。

ウ 障害を持っているという理由で親が世間体を気にして、今まで小学校にも中学校にも普通に通わせてもらえなかったことを知って、親に対して怒りを感じている。

エ 合唱部に入ってコンクールに出て楽しいこともつらいことも経験してきた自分と、障害があるために普通の人と同じ生活を送ることができなかったことを比べて、あわ憐れみを感じている。

問七 傍線の部分③「体の奥から、音楽があふれてくる」の説明として最も適当なものの記号を書け。

ア コンクールで入賞することを目標にしてきたが、コンクールが終わり、上手に歌わなければならないという気持ちから解放されたことで、改めて歌を歌うこと自体の喜びや楽しさを体全体で感じている様子。

イ コンクールのために半ば強制的に課題曲の練習をさせられて、歌うことに対する苦しさだけを感じるようになってしまったが、自分が本当に歌いたい歌を歌えるようになったことを心の底から楽しんでる様子。

ウ 楽しいこともつらいことも一緒に味わってきた合唱部の仲間と、最後のコンクールの後に声を合わせて歌うことで、今まで忘れてしまっていた仲間の大切さをしみじみと感じて感動に浸っている様子。

エ 今までは高い技術を身に付けた先生の正確な伴奏で歌ってきた合唱部員たちが、声だけの合唱をすることに物足りなさを感じていたが、周囲の人たちが自然と合唱に参加してくれたことに心から感動している様子。

問八 傍線の部分④「胸の中にある、疼きのようなもの」とは何か、文中から十五字以内で抜き出せ。(句読点を含む。)

問九 傍線の部分⑤「私たちの意図」とはどのような意図か。五十字以内で書け。(句読点を含む。)

三 次の記事は『おくのほそ道』の福井から敦賀の場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

福井は三里ばかりなれば、夕飯ゆふけしたためて出るに、たそかれの路、たどたどし。ここに等裁とうさいといふ、古き隠士いんしあり。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋ぬ。はるか十とせ余りなり。いかに老さらほひてあるにや、將はた、死にけるにやと、人に尋ねはべれば、いまだ存命して、そこそこ教ゆ。市中しちゆうひそかに引入て、あやしあやしの小家に、夕顔・へちまのはえかかりて、鶏頭けいとう・ははきぎに戸ぼそをかくす。さては此このうちこそと、門をたたけば、佻わびし氣なる女の出で、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは、此あたり何がしといふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へ」といふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそ、かかる風情ふせいははべれと、やがて尋ねあひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなどにとたび立つ。等裁も共に送らんと、裾すそおかしうからげて、路の枝折しをりとうかれ立つ。

ア やうやう、白根しらねが嶽たけかくれて、比那ひなが嵩たけあらはる。あさむづの橋をわたりて、玉江たまえの蘆あしは穂いに出にけり。鶯うぐいすの関を過ぎて、湯尾峠ゆのをを越れば、燈ひらが城、かへるやまに初雁はつかりを聞きて、十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。

その夜、月殊こころに晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路こしちの習ひ、なほ明夜の陰晴いんせいはかりがたと、あるじに洒すめられて、けいの明神みやうじんに夜参やさんす。仲哀ちゆうあい天皇の御廟ごべうなり。社頭しやとう神さびて、松の木この間に月まのもり入たる、おまへの白砂しろすな、霜しもを敷しけるがごとし。往昔そのかみ、遊行ぎゆうぎやう二世の上人じやうにん、大願たいくわん発起はつぎの事ありて、みづから草を刈り、土石いしを荷にひ、泥濘でいていをかはかせて、参詣さんぎ往來いりわらの煩わづらひなし。古例、今にたえず、神前に真砂まごを荷にひ給ふ。これを遊行ぎゆうぎやうの砂持すなもちと申しはべると、亭主ていしゆのかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず、雨降る。

名月や北国日和定なき

福井は三里（約十二キロ）ほどの所なので、夕飯をすませてから出かけたところ、日暮れ時の道は足元あしもともたしかでなく、なかなかかどらない。さて福井には等裁という古くからの隠士（世を捨てて隠れて住む人）がいる。いつの年だったか、江戸にやって来て、私を尋ねてくれたことがある。もうずっと前、十年余りも昔のことだ。いまはどんなに老いぼれてしまっているだろう。あるいは死んでしまったらどうかと思いつながら、人に尋ねたところ、まだ生きていて、どこそこに住んでいると教えてくれた。尋ねあててみると、町中から引っこんだひっそりとした所に、があり、夕顔やへちまが生えかかり、入口は鶏頭けいずや箒草ほうきぐさに隠れるばかりだ。たしかにこの家にちがいないと、門口をたたくと、わびしげな女が出て来て、「どこからおいでのお坊様でしょうか。主人はこの近くの何々という人の家に参りました。もしご用なら、そちらへお尋ねください」と言う。どうやら等裁の妻だとわかる。昔の物語『源氏物語』夕顔巻には、きつとこんな趣のいっせつ一節があつたことだろうとおもしろく、やがて等裁を尋ねあて、その家に二晩泊まった後、八月十五夜の名月は敦賀の港で鑑賞しようと、福井を立つた。等裁も、それでは一緒に敦賀まで見送ろうと、着物の裾をしゃれた格好にからげ、さあ道案内をしましよと、浮き浮きした調子である。

歩いているうち、ようやく白根が嶽（白山）が隠れて見えなくなり、比那が嶽（日野山）が見えてきた。浅水の橋を渡り、玉江という場所来ると蘆は穂が出ている。鶯という関所を通り、湯尾峠を越えると燧が城があり、山つづきの帰山かえるやまで初雁の声を聞き、十四日の夕暮れ、敦賀の港に着いて宿をとった。

その夜は、月がとりわけ晴れて美しかった。「あしたの十五夜もこんなでしようか」と言うと、「変わりやすいのがこの北陸路の常ですから、」と宿の主人は言つて、酒を勧める。私はそのあと主人の言葉に従つて、氣比明神に夜参りをした。この神社は仲哀天皇の御廟ごびやうである。社頭こつとうは神々しく、松の木の間に漏れてさす月の光で、神前の白砂は一面霜を置いたようだ。「昔、遊行二世の上人が大願を思い立たれ、みずから草を刈り、土や石を荷にない運んで、水たまりを乾かされたのです。それ以来この明神に参詣さんげいする行き来の心配がなくなりました。その昔の例が、いまでも残っていて、代々の遊行上人が、神前に砂をかついでおいでになります。この行事を『遊行の砂持』と申しております」と宿の主人が語つた。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、宿の主人の言葉のとおり、雨が降った。

名月や北国日和定なき

(小学館日本古典文学全集『おくのほそ道』による)

※1 「社頭」…社殿の前のあたり

※2 「遊行二世の上人」…他阿上人のこと

※3 「砂持」…遊行二世の事蹟を記念し、代々の遊行上人がこの地に来ると、儀式として海岸の白砂を神前に運ぶ

問一 次の文章は、本文についての解説である。次の空欄A～Cに入る最も適当な言葉を漢字で書け。また、D・Eは古文から抜き出して書け。

『おくのほそ道』は、(A) 時代初期に活躍した俳人(B) の作品である。東北地方へ旅し、帰りに北陸をまわって、大垣に着くまでの約六か月間の旅の様子を書いた(C) 文である。本文前半の場面では、(D) という人物を登場させ、(E) を踏まえた情感豊かな描写が印象深い。

問二 波線の部分ア「やうやう」・イ「煩わづらひ」を現代仮名遣い(ひらがな)に直して書け。

問三 傍線の部分①「あやしの小家」の現代語訳として、空欄 に入れるのに最も適当なものの記号を書け。

ア 居心地がいい小さな家

イ 珍しい小さな家

ウ みすぼらしい小さな家

エ 怪しい小さな家

問四 傍線の部分②の係助詞「こそ」について、結びの語を抜き出せ。

問五 傍線の部分③「路の枝折とうかれ立つ」とあるが、なぜうかれ立ったのか。その理由を三十五字以内で書け。(句読点を含む。)

問六 傍線の部分④「明夜の陰晴はかりがたし」の現代語訳を書け。

問七 「名月や北国日和定なき」の句に込められた作者の心情として最も適当なものの記号を書け。

ア 今夜は中秋の名月を期待していたのに、あいにくの天気となり途方に暮れている。

イ 今夜は中秋の名月を期待していたのに、あいにくの雨となってしまつて残念である。

ウ 今夜は中秋の名月を期待していたのに、あいにくの雨となり月も悲しんでいるだろう。

エ 今夜は中秋の名月を期待していたのに、あいにくの天気となり北国を恨んでいる。